

過労死ゼロ読書感想文⑦

「過労事故死—隠された労災」を読んで

——すべての働く人、家族、将来働く子供たちに読んで欲しい本だ。そして1番読むべきなのは、社員を守るべき経営者の方々かもしれない。最近、過労死、過労事故死の問題が、ニュース、インターネット、SNS、その他メディアにおいて多く取り上げられている。しかしながら、本当に自分や、自分の愛する人が過労死にあったらと考えたことがある人が何人いるだろうか？

私自身、過労死について、漠然とした知識しか持たず、その問題を身をもって実感したと言う事は無い。しかしながら、知り合いから紹介されたこの本を読んで、働く人を取り巻く状況、過労事故死の悲劇、そんな中でも希望を失わず、社会のために戦いつながり合う人たちの光のようなものを知ることができた。

「過労事故死—隠された労災」は、扱っているテーマは、とても深刻なものであるが、多くの人に伝えたいという意味が感じられ、じっくりと読むことができた。おそらく高校生も読むことができるだろう。キャリア教育と言う意味でも、ぜひとも学生さんにも読んで欲しい。

「過労事故死—隠された労災」は、通勤中の居眠り運転で亡くなった息子さんの無念をはらすため、「過労事故死」認定裁判を闘った渡辺淳子さんの記録である。企業側の姿勢は、労働者を軽んじており怒りが湧いてくる。そして、日本の現状における労災認定の難しさを見ると悲しい気持ちになる。しかしながら、この物語は悲しみだけではない。子を思う母の愛や、まっすぐな弁護士の行動力。そして様々な人たちの思いが繋がって、多くの努力を経て、和解まですすむ。

もしかしたら、この本に出てきた1粒の希望は、これから先多くの人につながっていくかもしれない。いや、つなげていかねばならないのだと言う使命感も湧いてくる。この中に、裁判官の言葉が出てくるのだが、私は本を読みながら、思わずボロボロと涙を流しながら泣いてしまった。そして、この本の最終章では、社会に対する警鐘についても語られる。「勤務間インターバル規制」という言葉もこの本をきっかけに知ることができた。読み終わった後、私は、この本を多くの人に知って欲しいと切に思った。

2020年現在、働く人々を取り巻く状況は、明るいものだけではない。しかしながら、この本が多くの人に読まれて、そして知識を持った人々が世の中を明るくするために行動することを切に望む。そして自分自身も行動していきたい。